

パリから見えるフランス社会の今

藤田 友尚 教授（フランス語・フランス文学）

世界の旅行先人気ランキングで、フランスはここ数年常に一位の座を保持している。2009年度、年間の外国人観光客入国者数は7400万人を超え、アメリカの5400万人、スペインの5200万人をはるかにしのぐ。なかでもパリは、年間2100万人以上の観光客が訪れるフランス屈指の観光都市だ。

文化遺産が豊か、世界的なブランド品が多い、グルメをもうならせるレストランが軒を連ねるなど、観光地としてのパリの魅力はいろいろある。しかし、実際この街を旅して私が興味をそえられるのは、そこで出会う光景から現在のフランス社会の素顔が垣間見えてくるという点にある。それはまた、今後の日本の社会の方向性を考えるヒントにもなる。そのような視点から、観光客がパリでよく出会う二つの光景をとりあげ、そこから見えてくるフランス社会の今の素顔を見てみよう。

「パリは治安が悪い」、観光客の間でこれは常識だ。ロマ（ジプシー）の子供たちだといわれている集団に取り囲まれ金品を盗まれる事件は、パリの光景の一部となっているほどだ。私も何度か狙われたことがある。相手は子供、観光客と見るとゲーム感覚で誰かれかまわず見境なしにやってくるのでたちが悪い。

昨年、さすがパリは違うなと感じたことがあった。あるメトロの駅のプラットフォームで電車を待っていた時だった。向かい側のプラットフォームの端に、13歳から16歳くらいの女の子たち数人がたむろしていた。浅黒い肌の色からロマ、あるいはアラブ系の女の子だろう。すると突然、駅構内に女性の声でアナウンスが流れた。

「今、プラットフォームの端にいる数人の子供たちはスリです。用心して下さい」。それを聞いた女の子たちはキヤッキヤと笑いながら階段を駆け上がっていった。メトロ構内には監視カメラが設置されているので、いつもの娘スリ集団に気がついた係員が注意の放送を流したのだ。

なぜ彼女たちのようなスリがいるのか。そこには、フランス社会が直面している移民問題が背景としてあり、その問題がフランスの植民地政策の負の歴史と結ばれているだけに一筋縄では行かず、根が深い。

フランスは17世紀前半から奴隷制を維持し、アフリカから黒人奴隷をカリブ海の植民地まで運び、労働させていた。大革命後も、その理念である「人権宣言」を謳いながら、奴隷制は1848年まで存続する。奴隷制が廃止されても植民地の崩壊につながることはなかった。西欧からみて辺境の「遅れた」民族を「文明化」することが文明国家としての使命であるとし、フ

ランスは北アフリカ地域の植民地拡張へと乗り出した。平野千果子が喝破したように、「文明化」はこの国の生産性向上に恰好のイデオロギーだった。

20世紀に入り、「栄光の30年」と呼ばれる経済成長期（1945～75）になると、スペインやポルトガル、マグレブ諸国などから移民労働者を大量に受け入れた。彼らの多くはブルーカラーの仕事に従事しフランスの経済成長を支えてきた。

現在、フランスの人口6300万人の約8・3%、520万人が移民だ。しかもフランスは260万人の失業者を抱え、解決の糸口さえいまだ見いだせない。低迷する経済状況のなかで、外国人労働者の職場として低賃金で過酷な労働条件の職種が固定化してしまっている。二つ星・三つ星のホテルのルームメイドのほとんどが移民労働者なのもそのためだ。

「自由・平等・友愛」という共和国の価値のもとで移民二世・三世たちは教育を受ける。だが、法のもとで平等だと言われながら育つても、彼らを待ち受ける社会の現実は厳しい。2007年から09年にかけて15～24歳の若年層の失業率が調査され、両親のどちらかが移民の間に生まれた子供と両親ともフランス人の間に生まれた子供との間でデータが比較された。それに

よると、両親のどちらかが移民の間に生まれた子供の失業率は35・4%、それに対して両親ともフランス人の間に生まれた子供の失業率は19%だった。また、移民とその子供たちの60パーセントが差別的扱いを受けたことがあると回答している。

観光客としてはメトロの娘スリ集団の餌食にされたくない。だが、彼女たちが自分たちの与り知らない歴史の中に放りこまれ、その文脈を生きたことを強いられているという事実は知っておきたい。彼女たちのしたたかさと逞しさは、フランス史の負の部分を負いながら生き抜く術なのだ。社会の偽善的側面に傷つきながら「生きる力」を身につけることになったのは、やはり切ない光景ではあるが。

パリの恋人たちは公道でよくキスをする。フランスの国民的写真家ロベール・ド・アノーの「パリ市庁舎前のキス」(1950)の写真はあまりにも有名で、観光客にとつていかにも「パリの」な風景の一部といえるほどだ。公園のベンチやセーヌの河岸で抱擁している男女がいるのは微笑ましく、それなりに絵になる(ただし、公道で抱擁しているお二人は道をふさいでかなり迷惑)。恋愛大国フランスというロマンティックなイメージにパリのキスはお似合いではある。が、しかし、恋人たちの天国とはいかないのが実情だ。

愛する二人(同性でもかまわない)がカップルで生活するには三つの形態がある。まずは法的な手続きを経た結婚。この形態を選択するカップルは年々減少している。逆に増加しているのがパックス(PACS、連帯市民協約)だ。もともと同性愛者のカップルを考慮して1999年に導入された制度だが、異性同士のカップルにも適用される。法律がお墨付きを与えた同

棲関係だ。税制上の優遇措置が受けられるほか、カップルの片一方の意志で契約が解除でき、離婚のような面倒な手続きを経ずに別れられる。最後が事実婚で、入籍せずに二人の同意で一緒に暮らしているカップル。

このように多様なパートナーシップのあり方を認めることは、そのまま家族形態の複雑さに反映されることになる。その良い例がサルコジ大統領の家庭だ。

現在のカルラ夫人は大統領の三人目の妻で、大統領は最初の妻との間に息子二人、二番目の妻との間に息子一人をもうけている。一方のカルラ夫人は、最初の夫との間に息子一人があり、この連れ子とともに現在三人で大統領府で生活している。フランス的なのは、大統領は最初の妻との間に生まれた二人の息子と行き来があり、離婚後も親子関係が断絶していないことだ。つまり、離婚によってカップルの関係が終わっても親子関係は維持され続ける。浅野素女の言う「子供を軸とした家族空間」が、新たな家族の形態として加わったのだ。このような家族形態を「再構成家族」と呼び、18歳以下のフランス人の8%強にあたる約120万人がこの家族に属している。「お一人様」やシングルマザー(ファザー)から「再構成家族」まで、フランスの家族のあり方は実に複雑だ。

さまざまな家族形態を模索し続けるこのような社会に生きる恋人たちは、恋愛関係の儚さを自覚しないわけにはいかない。カップルの絆の脆いことがわかつていくだけに、彼らにとつてはいつでもであろうと愛の証を確認し合うこと(けっこう面倒かも)が重大事となる。パリで目にする恋人たちのキスは、恋愛関係をどこかクールに受け止めながらも、熱烈な愛情表現は必要という、いわばフランス人が好む演劇的な振る舞いだといえる。

超高齢化で労働人口が減少していく日本は、早晚、移民労働者の問題に直面することだろう。また、増加する離婚は家族のあり方を大きく変化させている。これら日本社会の変化はフランス社会がすでに経験済みであり、フランスを旅行するとその変化のインパクトが実感として伝わってくる。旅は良き気分転換であるが、同時に、日常生活に埋没して鈍化していた感覚が目覚め、自分の生きている社会の現実に対する感受性が鋭く動き出す時でもある。

本文のデータは、フランス経済・財政・産業省「産業・競争力・サービス総局(DGCI)」、フランス国立統計経済研究所(INSEE)、フランス国立人口統計学研究所(INED)、世界観光機構(OMT)等が発表している公式の数字を利用した。その他、*Le Monde*、*Le Figaro*等の新聞、*Le Nouvel Observateur*、*L'Express*等の雑誌も参照した。

1 参照：平野千果子「文明化」とフランス植民地主義、「思想」No.5、岩波書店、2000年；平野千果子「フランス植民地主義の歴史」人文書院、2001(2010)。

2 アルジェリア・モロッコ・チュニジアの3国を指す。

3 「フィガロ」紙のある記者は、今や結婚しているカップルの3組に1組が離婚するのに、2009年、512000人が結婚したと伝えている。そして辛辣にも、結婚に踏み切った人を「Kamikaze」(フランス語では「カミカズ」と発音され、日本語の「神風特攻隊」からきている。「無鉄砲な(自殺行為をする)人」の意と呼んで、皮肉っている。

4 浅野素女「フランス家族事情」岩波書店、1995(2006)、p.171。

5 「再構成家族」はfamille recomposéeの訳であるが、浅野素女は前掲書のなかで日本語として「座りが悪い」という理由で「複合家族」という訳語を提案している(916頁)。本エッセイでは、フランス語の本来の意味に近い「再構成家族」という訳語を採用した。